



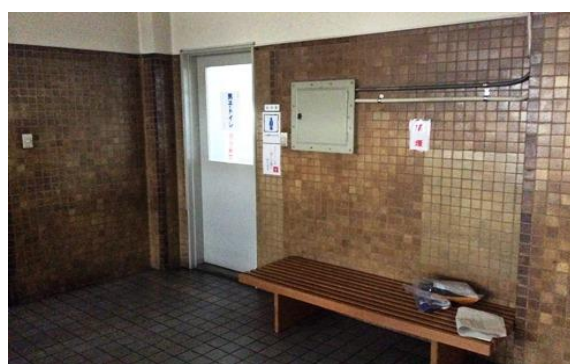
(左右写真について)

日本陶磁器センターは、新旧の建物があり、写真はいずれも旧館。旧館を北に移動してその跡に新館が建っている。新館はえんじ色のタイルが張ってある。旧館の外壁には筋付施釉タイルと一部テラコッタがある。写真左は西面、右は北面の壁。旧館の南面に隣接して新館が建っている。



平物タイルは、二丁掛60×227で、横目地12、縦目地5の馬踏み目地。押し成形機から出たところで等間隔で細い釘で浅く引っ掻き、筋面ができています。横目地を強調するために濃灰の目地材が入り、縦目地は目立たないようにほぼ同系統の色目地が入っている。

窓周りは段差がつけてあり、それをWの形状、直角を3カ所で折り曲げた形の特別な役物を使って張ってある。手の凝った仕上げとなっている。



トイレ付近のタイル張り



窓周りの近接画像。右端の断面は平物の小端に筋をつけて断面を筋面に仕上げている。この部分の厚さが15mmなので、特別な曲りの役物を使ったわけではないが丁寧な仕上げである。



(左右写真2点について)

階段の上り口の床のタイル張り。廊下の腰壁に施釉ボーダータイル(幅30)、階段腰壁に75角の施釉タイル、階踏面に同色同寸のタイル、壁側の見切りに施釉ボーダータイル。階段の手すりには磨きの天然石が使われている。



(左右2点の写真について)

いずれも、新旧の建物の接合部分に残るかつての表側にあった壁面を飾ったテラコッタ



(左右2点の写真について)

地階にある通用口の床のモザイクタイル。タイル寸法8分(24mm)

【特徴】

内部の正方形のタイルとボーダーのタイルには、伝統的な窯変釉が使われ、贅沢な仕上げが感じられる。外壁はスクラッチの流行した時期ではあるが、その平均的な筋の数や深さと比較すると、かなりシンプルな意匠となっている。スクラッチ(引っ掻き)で表面に付着する屑が少ないので、後々の剥がれて下地が見えてくる不具合は避けられそう。当時のスクラッチタイルと同様、横筋の意匠を強調したタイル張りがされている。